

平成 24 年度 前期授業評価アンケート結果

<現状と課題>

基礎ゼミナールの授業評価について

横田 佳之（基礎ゼミナール部会長、都市教養学部理工学系教授）

都市教養プログラム・授業評価について

大島 資生（都市教養プログラム部会長、都市教養学部人文・社会系准教授）

実践英語の教育授業評価－授業評価の検討とこれからの課題－

藤井 誠（英語教育分科会座長、都市教養学部人文・社会系准教授）

情報リテラシー実践 I での授業評価 (SE) の結果

永井 正洋（情報教育検討部会部会長、大学教育センター教授）

理工系共通基礎科目の授業評価結果と今後の課題

岡本 龍史（理工学系 FD 委員会委員長、都市教養学部理工学系准教授）

基礎ゼミナールの授業評価について

基礎ゼミナール部会長
都市教養学部理工学系教授
横田 佳之

【はじめに】

「基礎ゼミナール」は、
「考える・調べる・発表する」
という作業を通じて、

「課題発見能力・問題解決能力・自己表現能力」
の育成を目的とするゼミナール形式の授業で、1年前期の必修科目です。今年度は、受講生1681名に対して80クラスが開講されました。本稿では、FD委員会と教務委員会・基礎教育部会が平成24年度に実施した「基礎ゼミナールの授業評価アンケート」の結果について、その概要を報告します。

【調査対象と回収率】

調査対象は、受講学生および授業担当教員で、受講学生1681名中1336名（回収率79.5%）、授業担当教員80名中68名（回収率85.0%）の回答がありました。残念ながら、過去3年間で最も低い数字になってしまいました。以下、学生・教員による授業評価をそれぞれSE・TEと略記します。

【質問項目】

質問項目（SEのみ）は表1の通りです。問1から問8まではいわゆる「共通事項」で、他の教養科目と同じ設問ですが、問9から問13までは基礎ゼミナ-

ールの「個別事項」となっており、基礎ゼミナールの目標である課題発見・問題解決能力（問10）、自己表現能力（問11）の達成度に関する設問を設定しています。また、1クラス24名以内という制約のため、必ずしも第1希望のクラスを受講できないことがあることをふまえ、テーマに対する関心（問9）、第1希望のクラスであったかどうか（問13）についての設問を設けています。

【アンケート結果の分析】

(1)「共通事項」のSE平均値は、他の教養科目と比較しても、かなりの高水準です。ここ数年のトップ4は、教員の対応（問4）、学生の意欲（問1）、満足度（問8）、説明の的確さ（問3）ですが、今年度はとくに、教員のスキル（問3・4）が評価されているように思えます。

	2010	2011	2012
【対応】	4.05	3.99	4.11
【意欲】	3.97	3.93	4.01
【満足】	3.94	3.91	3.99
【説明】	3.91	3.86	4.00

目的意識（問2）も3.9ポイント前後、評価方法の説明（問6）、達成度（問7）も3.6ポイント前後まで伸

表1 授業評価(SE)の質問

質問事項		
共通	問1	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。
	問2	授業の目的を意識しながら学習することができた。
	問3	教員の説明はわかりやすかった。
	問4	教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。
	問5	授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？
	問6	成績評価方法について十分な説明があった。
	問7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。
	問8	私はこの授業を受講して満足した。
個別	問9	この授業を受けた結果、授業テーマに関する関心が高まった。
	問10	問題発見と、その解決に向けた取り組み姿勢の重要性を認識した。
	問11	議論や発表などの自己表現能力を向上させることができた。
	問12	受講生による議論・調査・発表の部分に対し、教員によるテーマの解説部分の時間配分はhowでしたか？
	問13	この基礎ゼミの授業は第何希望でしたか？

びてきており、決して悪くない水準です。担当教員のみなさんの努力の賜物だと思います。

(2) 「個別事項」のS E平均値とT E平均値の推移を比較してみます。まず主題への関心(問9)ですが、

	2010	2011	2012
【S E】	3.83	3.89	3.96
【T E】	4.17	4.06	3.95

となっており、S E平均値は順調に増加、T E平均値は単調に減少しつつ、健全なラインに収束しているようです。また、問題発見能力(問10)も、

	2010	2011	2012
【S E】	3.84	3.88	3.91
【T E】	4.08	3.95	3.97

となっており、同じ傾向にあります。ところが、表現能力(問11)に関しては、

	2010	2011	2012
【S E】	3.71	3.77	3.77
【T E】	4.20	4.08	4.06

となっており、学生と教員の認識に、少しギャップがあるように感じます。また、S E平均値をさらに引き上げるには、何かしらの工夫が要りそうです。

(3) 第1希望のクラスであったかどうか(問13)と他の項目のS E平均値の相関関係ですが、ほぼすべての項目で有意の差が現れました。例えば、学生の意欲(問1)、満足度(問8)、主題への関心(問9)のS E平均値は以下の通りです。

	【意欲】	【満足】	【関心】
第1希望	4.11	4.15	4.10
それ以外	3.87	3.76	3.75

【自由記述欄より】

2012年度に教員が行った具体的な工夫として、

- ・授業専用サイトを開設した
- ・施設訪問や現地調査を取り入れた

- ・質問を促すため、質問票を使っている
 - ・教員の話短縮し、グループワークを増やした
 - ・毎回感想を集め、授業にフィードバックした
- などの例がT Eの自由記述欄に書かれています。一方、S Eの自由記述からネガティブな意見を拾ってみると、
- ・先生の話が長くてわかりにくい
 - ・基礎ゼミ間で課題量の差が大きすぎる
 - ・シラバスと実際の内容にギャップがあった
- などがありました。ポジティブな意見が多いなか、このような厳しい意見は貴重です。とくにシラバスに関しては、より正確なものにするべきだと思います。とはいえ、S Eの自由記述で代表的なものは、
- ・グループワークがとても楽しかった
 - ・プレゼンテーションや質問のコツがわかった
 - ・学生の自主性を尊重してくれた
- などで、今回はとくに「グループワーク」や「プレゼンテーション」というキーワードが多かったと思います。

【おわりに】

基礎ゼミナールの授業評価結果をみると、学生の満足度も高く、授業の目的もある程度達成されていると思います。ただ、シラバスの実質化など、まだまだ課題があることもわかりました。基礎ゼミナール懇談会などを通じて、問題意識とノウハウを共有し、基礎ゼミナールのさらなる充実に努めていきたいと思っています。

都市教養プログラム・授業評価について

都市教養プログラム部会長
都市教養学部人文・社会系准教授
大島 資生

【はじめに】

本学の都市教養プログラムは、「大都市に関連する様々な課題に取り組み、解決できる人材の育成」を目的とし、「様々な領域の学問からのアプローチを学習する手がかりを学ぶ」ための教養科目群として位置づけられている。ここでは、2012年度前期の授業評価アンケートの結果を中心に、同プログラムの現状と課題を考察する。

【質問項目の概要】

まず、授業評価アンケートの設問を紹介する。表1は学生への質問項目(SE)である。教員への質問項目(TE)は、同趣旨の内容を、教員の視点で問うものである。

表1 質問項目(SE)

問1	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ(態度)
問2	授業の目的を意識しながら学習することができた(意識)
問3	教員の説明はわかりやすかった(説明)
問4	教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた(対応)
問5	授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか?(時間)
問6	成績評価方法について十分な説明があった(成績)
問7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた(成果)
問8	私はこの授業を受講して満足した(満足)
問9	この授業のシラバスは授業選択に役立つような内容でしたか?(シラバス)
問10	授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか?(難易度)
問11	この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか?(視野拡大)
問12	授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか?(受講生数)

続いて、都市教養プログラムの個別の質問項目について、それぞれの設問が意図するところを確認しておく。

まず、問9(シラバス)は、シラバスの内容に関して、授業選択という目的に特化して問うものである。都市教養プログラムは新1年生が受講者のかなりの割合を占める。1年生が大学で初めて授業選択をするためのよすがとして、シラバスの果たすべき役割は大きい。

その意味で設けられている質問である。

次に、問10(難易度)は、授業全体の難易度についての所感をきいている。都市教養プログラムは、様々な専門領域への興味をもたせられるよう紹介する内容を含む。適度にわかりやすく、適度に「歯ごたえがある」内容が理想的だと言えよう。このレベルが実現できているか否かを問うための設問と言える。

最後に、問11(視野拡大)は、都市教養プログラムの目的にある「様々な領域の学問からのアプローチを学習する手がかり」を、受講者が得ることができたか否かを問うている。

【アンケート結果】

授業評価アンケートについては、毎年、回収率の低さが問題となっている(佐藤、2010)(下川、2011)。学生による評価については、母数が「履修登録者数」となっている。この中には、登録はしたものの、諸般の都合で全く出席しなかった者や、初めの1、2回のみ出席したのみでその後は参加せず、成績評価に至らなかった者も含まれる。実際に授業に参加し、成績評価を受けた者を母数とすべきではなかろうか。厳正な「評価者」たりうるのは、「評価対象」(授業)を相応の時間観察(受講)した者(学生)だと考えるべきであろう。

なお、教員の回収率の推移は表2の通りで低下傾向にあり、特に2012年度前期は前年度に比して大幅に低くなっている。改善が望まれる。

表2 TE 教員数・回収数・回収率

	担当教員数	回収数	回収率
2009	129	91	70.5%
2010	140	90	64.3%
2011	133	86	64.7%
2012	135	78	57.8%

項目ごとの考察に移る。

表3 SE・TE 平均値

	SE(平均値)	TE(平均値)
問1(態度)	3.46	3.56
問2(意識)	3.42	4.05
問3(説明)	3.62	4.13
問4(対応)	3.55	3.91
問6(成績)	3.51	3.95
問7(成果)	3.33	3.82
問8(満足)	3.63	3.60
問9(シラバス)	3.51	3.90
問10(難易度)	2.77	2.88
問11(視野拡大)	3.75	4.08

今年度前期の学生と教員の回答を比較すると、問8以外はいずれの項目も平均値は教員が高い。特に差がある(0.5ポイント以上)のは問2(意識)、問3(説明)である。この傾向は昨年度も同様であった(問2:学生3.37/教員4.09、問3:学生3.61/教員4.20)。昨年の所見「そのまま教員と学生の実際の取り組みの差と考える必要はあるまい」(下川、2011)は妥当なコメントだと思われるが、認識の差を埋める努力は引き続き必要である。

【経年変化】

表4はSEとTEそれぞれの平均値の経年変化である。SEでは問6(成績)、問7(成果)、問9(シラバス)でやや数字が改善されている。また、問1(態度)、問2(意識)でもわずかに改善の傾向が見られる。

問6の成績評価法についての説明、問9のシラバスの書き方といった、授業のいわばハード面に近い部分は具体的な対応がしやすい。この面での改善は教員の努力の成果であり、都市プログラムの目的が教員間で共有されてきていることのあらわれと言えよう。

他方、TEでは明らかな傾向は見られない。

表4 SE・TE 平均値の経年変化

<SE>

問	07前	07後	08前	08後	09前	09後	10前	10後	11前	11後	12前
1	3.27	3.31	3.36	3.35	3.30	3.38	3.40	3.43	3.39	3.54	3.46
2	3.23	3.35	3.33	3.36	3.25	3.39	3.35	3.44	3.37	3.54	3.42
3	3.50	3.60	3.63	3.63	3.51	3.65	3.64	3.65	3.61	3.73	3.62
4	3.48	3.49	3.50	3.50	3.45	3.51	3.57	3.55	3.56	3.70	3.55
6	3.22	3.34	3.36	3.37	3.38	3.44	3.45	3.47	3.50	3.61	3.51
7	3.12	3.25	3.24	3.26	3.17	3.29	3.28	3.34	3.30	3.44	3.33
8	3.49	3.60	3.59	3.58	3.51	3.63	3.64	3.64	3.59	3.76	3.63
9	3.22	3.29	3.23	3.27	3.14	3.31	3.48	3.47	3.45	3.58	3.51
10	2.81	2.91	2.74	2.85	2.69	2.81	2.73	2.82	2.77	2.82	2.77
11	3.66	3.78	3.69	3.72	3.60	3.75	3.73	3.77	3.73	3.88	3.75

<TE>

問	07前	07後	08前	08後	09前	09後	10前	10後	11前	11後	12前
1	3.68	3.60	3.66	3.63	3.65	3.68	3.67	3.47	3.63	3.67	3.56
2	4.08	4.00	4.14	4.13	4.08	4.07	4.01	4.05	4.09	4.01	4.05
3	4.14	4.10	4.17	4.33	4.14	4.24	4.12	4.18	4.20	4.23	4.13
4	3.86	3.87	3.94	3.91	3.86	4.08	3.87	3.99	3.87	4.00	3.91
6	3.97	3.89	3.84	4.00	3.81	4.14	3.87	3.93	3.95	4.06	3.95
7	3.68	3.77	3.71	3.80	3.67	3.82	3.81	3.82	3.86	3.95	3.85
8	3.64	3.66	3.69	3.62	3.58	3.74	3.69	3.71	3.67	3.62	3.60
9	3.88	4.00	3.92	3.89	3.80	4.05	3.90	3.84	3.87	3.80	3.90
10	3.25	3.10	2.85	3.00	2.87	2.85	2.74	2.92	2.97	2.86	2.88
11	4.18	4.31	4.35	4.43	4.19	4.36	4.10	4.20	4.22	4.20	4.08

【おわりに】

都市教養プログラムは、次年度から次の二つの範疇に再体系化される。

○教養科目：各テーマにおける知識を身に付け、理解を深めるとともに、社会人として必要な幅広い教養を身に付け、総合的な思考力や問題解決能力を育成することを目的とした科目。

○基盤科目：各領域において学問形成に不可欠な基礎的・導入的な知識及び能力等を修得することにより、専門分野の学習に備えることを目的とした科目。または、自らの専門とは異なる分野・領域についての知識やものの考え方を学び多角的な視野をもつことを目的とした科目。

科目群ごとの目的を明確に打ち出す新しい体系の中で、これまでの蓄積を最大限に活かして更なる改善を進めていく必要がある。これと連動して、授業評価アンケートの内容、実施方法についても柔軟に検討していくこととなるだろう。

【参考文献】

- 佐藤潔(2010)「都市教養プログラムの現状と課題—授業評価アンケート(2010年度前期)の解析から—」、FDレポート『クロスロード』10号 pp.65～68
- 下川昭夫(2011)「都市教養プログラムの現状と課題」、FDレポート『クロスロード』11号 pp.51～52

実践英語の教育授業評価

授業評価の検討とこれからの課題

英語教育分科会座長
都市教養学部人文・社会系准教授
藤井 誠

【はじめに】

2005年に東京都立大学から首都大学東京へと改組されて以来、本学の1・2年次の英語教育（「実践英語I・II」）は、学生の英語力向上のため新たな様々な試みを行ってきた。新入生全員が4月初旬に実施されるリスニングをも含むクラス編成テストを受け、その結果に基づいてA、B、Cの3つのレベルにグループ分けを行い、クラス内での学生の英語力の均等化を図り、より円滑な授業運営を目指している。日本人教員の授業では読解力・語彙力の向上を目指した授業がなされる一方、NSEの授業ではスピーチ・プレゼンテーションを含むオーラルでのコミュニケーション能力の育成を基本とした授業が行われている。

1年次では、日本人教員のクラスでは全学共通の統一教科書を使用し、各学期末に分科会が作成した統一試験を実施している。選定される教科書はオックスフォード大学出版局など海外で出版されたものを毎年新たに選定している。ただ再来年以降は過去に採用した教科書であっても内容的に良かったものは、再度選定することも検討している。NSE教員による授業はベルリッツに授業委託をしているが、まったくまかせっきりというわけではない。適宜ベルリッツのコーディネーターと密接に連絡を取り、本学の英語教育の理念に即した実践的な英語教育授業が実施されるよう努めている。NSE教員による授業も学期末に統一テストを実施している。

2年生に関しては、日本人教員のクラスでは、Reading、Media、Comprehensiveという3つのジャンルを設定し、各教員がそれぞれのカテゴリーに即した内容の授業を行い、各教員が個別に試験を実施し成績評価を行っている。NSE教員の授業では、1年より引き続きベルリッツが作成したテキストである *Berlitz English for University 2* を用いて、オーラル中心の授業が行われている。このように、本学の実践英語教育は英語の読み・書き・話す・聞くという4技能の総合的な英語力の向上を図るべくカリキュラムが構成されている。

【個別質問事項について】

実践英語における個別の質問項目である問9は、今年度使用した教科書（*Cover to Cover 3*、オックスフォード大学出版局）の難易度に関する質問である。今年度の教科書は、例年通り読解力を高めるためにデザインされており、あまり難解すぎない文章構成で、読むことへの自信を持たせ、学習意欲を高めるものとなっている。そのトピックは芸術、心理、自然科学、科学技術など、多岐にわたるジャンルからなり、読解力と語彙力の向上を目的としたものとなっている。そして各章の終わりには多読用の短編小説も含まれている。ただし、授業評価アンケートでは、昨年度の統一教科書については60.9%が「ちょうどよい」と回答していたが、今年度は50.6%であった。そして「やや難しい」、「難しい」と答えた学生は昨年度が22.4%であったのに対し、本年度は4.9%であった。他方、「やや易しい」、「易しい」と感じた学生は昨年度は16.6%であったが、本年度は44.5%であった。この結果から、本年度の統一教科書は難易度が多少低かったと言わざるを得ないだろう。実際、SE自由記述を見ても、「テキストのレベルが易しすぎる」、「予習をしなくてもわかってしまう」などの記述があった。テキストのレベルを上げると再履修の学生が増加する可能性もあるが、ある程度難しいチャレンジングなテキストを用いたほうが、学生の満足度を高めることにつながるのではないかと思われる。

問10は「*Cover to Cover 3*による授業の中で、一番関心を持って取り組むことができたのは何ですか」というもので、例年通り、「内容理解」、「英文解釈」、「語彙の学習」、「構文理解」の順であった。

問11は「この授業は、今後のあなたの英語学習に資するところがあった」かどうかを問うている。昨年度は「強くそう思う」、「そう思う」を合わせると49.3%であったが、本年度は44.6%となっている。平均値では、昨年度の3.41から0.1減少して3.31となっている。後述するが、さらなる学生の満足度を改善するために

2013年度より新たなカリキュラムを導入する予定である。

【共通の質問項目について】

問1の「授業に意欲的・積極的に取り組んだ」か否かという質問に対して、教員の平均値が3.70で、学生のそれが3.60ということで、両者の認識がかなりの一致してきている。

問2の「授業の目的を意識しながら学習することができた」という質問に対して、53.6%の学生が「強くそう思う」、「そう思う」と回答した。半数以上の学生がしっかりと学習目標を理解して学習に取り組んでいると言える。

問3の「教員の説明はわかりやすかった」という質問に対して、学生の平均値は3.69で教員のほうは4.15であった。アンケートを取り始めてから、常に学生と教師との認識の差があるので、これをできるだけ埋める努力が必要である。

問4の「教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた」という質問に対して、「強くそう思う」、64.8%であったが、教員は90%近くあった。

問5の「授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか」という質問に対して、87.1%の学生が1時間程度以下と回答している。これは看過することができない問題であるので、より多くの自宅学習の課題を与えるなど、適切な対策を講じる必要がある。

問6の「成績評価方法について十分な説明があった」という質問に対して、「強くそう思う」、「そう思う」と回答した学生は60.7%にのぼった。平均値は3.72で昨年の3.67を若干上回った。

問7の「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた」という質問に対して、「強くそう思う」、「そう思う」と回答した学生は37.5%で昨年(36.3%)より若干上昇した。

問8の「私はこの授業を受講して満足した」という質問に対して、「強くそう思う」、「そう思う」と回答した学生の平均値は3.44で、昨年(3.47)とほぼ同じであった。さらに学生の満足度向上のための努力と工夫が教員の側に求められている。

【今後の課題と展望】

2005年度以来「実践英語Ⅰ」では一冊の統一教科書

を選定し、A、B、Cのすべてのレベルの学生全員が使用して、学期末の統一試験を実施してきた。しかしながら、問9の「今年統一教科書の難易度はどうでしたか」という質問項目で「ちょうどよい」と回答する学生の割合は、年度によってかなりのばらつきが見られる。英語教育分科会ではアンケート調査を参考にしたり、クラスの担当教員の意見を聞くなどしてかなりの時間を費やして、毎年慎重に教科書の選定を行っている。しかし、実際のところあらゆるレベルの学生に適した教科書を選定するのは、容易なことではない。

その対応策として、2013年度からは4月のプレテスト(TOEIC)の結果から、各学部学系にAレベルクラス(5~10名)とCレベルクラス(5~10名)を設定し、それぞれのレベルに適した統一教科書とは異なる教材による教育を実施する予定である。また、Bクラスは従来通り統一教科書を使用するが、B1、B2、B3とさらに細かく下位分類を施し、よりきめ細かく学生のレベルに応じた英語教育を実施する。さらに、1年次の最後に再度TOEICのテストを行い、2年次のクラス編成を実施する予定である。このような来年度から実施される新たなカリキュラム変更が、学生の満足度の向上に結びつくことを切に期待するものである。

情報リテラシー実践 I での授業評価(SE)の結果

情報教育検討部会部会長
大学教育センター教授
永井 正洋

【はじめに】

本稿では、2008年度から2012年度までの前期末に行った情報リテラシー実践 I についての、授業評価アンケート (SE) の経年変化などについて報告する。

初めに、学生が入学時に既に獲得している情報リテラシーとそれを勘案した情報リテラシー実践 I カリキュラムについて述べたい。新入生の高等学校までの情報リテラシーを測定するために、平成18年度よりレディネス調査を毎年、行ってきた。この調査は主観調査(意識調査)と客観調査(テスト)からなるが、主観調査では、年々、学生の“できる”という意識の向上は見られるものの、多くの項目で肯定的意識が50%を超えておらず、未だあまり自信のない状態にあるといえる。更に、客観テストの結果は、他大学の平均と比べ若干低い得点を示しており、このことから、本学入学時には情報リテラシーが必ずしも十分に備わっているとはいえない。

これに鑑み、これまで情報リテラシー実践 I では、基礎・基本を重視した内容にて、授業を構成し情報教育を行ってきた。しかしながら、高度情報化社会の進展と各部局からの要請もあり、本年度から、より専門性を高めた授業として、情報リテラシー実践 I A (表計算ソフトを利用した統計処理) と I B (表計算ソフト

トを利用したプログラミング) という新たな科目を開設している。これと共に、これまでの基礎的な情報活用の実践力の育成を主眼とした情報リテラシー実践 I は、支持する声が大きいため引き続き開講し、これら3科目の中から1科目を選択必修として、学部・系・コースで選択するカリキュラムになっている。

【方法】

まず、SEの質問項目だが、共通項目が問1～8、個別質問項目が問9～12となっている。この個別質問項目は、情報教育検討部会にて設定される。

次に回答方法に関しては、5年に渡りeラーニングシステムを用いてアンケートを実施しているが、SEでのシステム利用のクラスの割合は2008年89.7%、2009年～2011年97.3%、2012年100%となっており、現在では全てのクラスで利用されている。なお、以下は本年度の実施状況である(紙面の関係上、SE:学生による授業評価のみ)。

・2012年度(SE)

実施時期:2012年7月9日～7月23日

対象:首都大学東京 情リテ I 受講者

回収人数/全人数:1,438人/1,683人(85.4%)

方法:BlackBoard(36クラス),マークシート(なし)

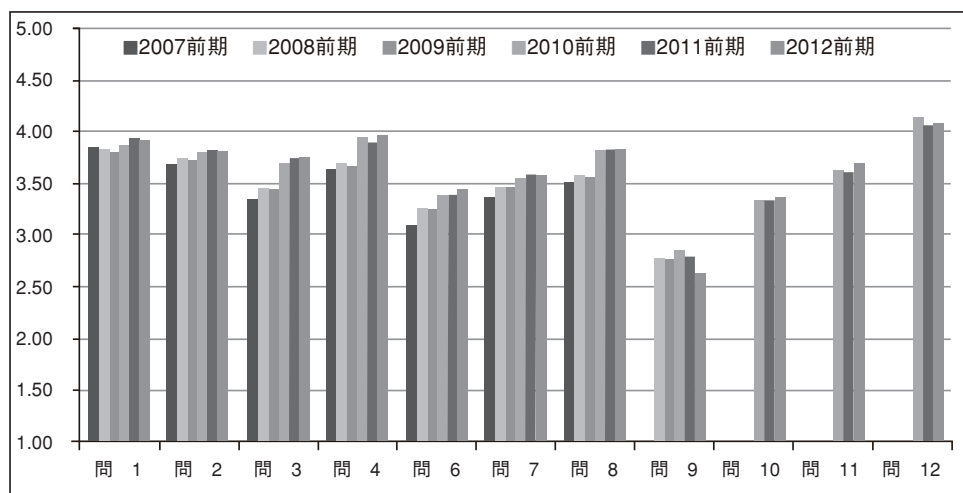


図1 2008～2012年度 SE 回答の経年変化

【結果と考察】

図1は、主に2008年度から2012年度前期末に行った情報リテラシー実践Iに関する授業評価アンケート（SE）の共通項目に関する経年変化を表している。授業の全般的な評価ともいえる「満足度（問8）」が、2012年度は2008年度と比べ高まっていることが分かる。教員の学生への「説明（問3）」と「対応（問4）」に関しては、上昇傾向が見られるが、このことは教員の授業に対する意識の改善と教育技術の向上によるものではないかと推察され、前述した満足度へも影響しているものと考えられる。次に、図2は2012年度の結果であるが、「難易度（問9）」に関しては、「5.易しかった」と「4.やや易しかった」で13.7%であり、「1.難しかった」と「2.やや難しかった」で41.1%となっていることから、学生にとっては、どちらかというとなりに感じる授業内容であったことが分かる。また、

このことは図1の「成果（問7）」が他の項目と比べ、特段高い状態でないことから分かる。ここで、情報リテラシー実践I A担当教員からは、特にその難易度の傾向を聞くことが多かったため、平成25年度のI Aでは、若干、基本的内容を増やすこととなった。最後に、ここ数年間、課題として認められることの一つに、授業時間外学習の不足があげられる。本年度の調査結果（問5）では、「ほぼ0分」が53.7%、「30分程度」が27.1%、となっており、昨年度より若干、改善しているものの単位の実質化の観点から更に改善が必要であると考えられる。これに関しては、自学自習用の教材として、eラーニング教材のコンテンツを開発・整備を行う中で学習の機会を保障していくと共に、それらを利用して学生が授業外学習を行うことを評価の対象にすることも検討していきたい。

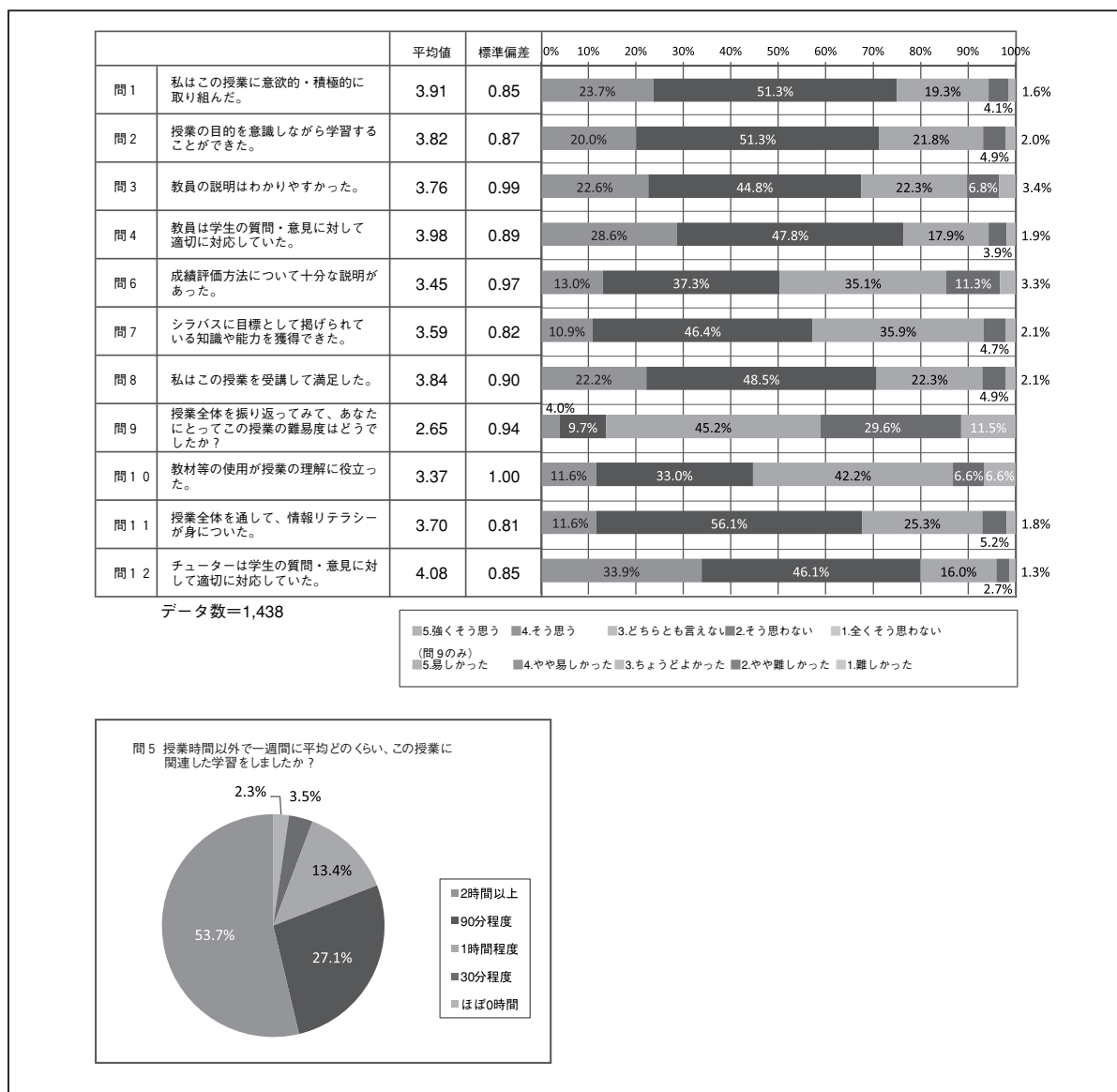


図2 2012年度SE結果

理工系共通基礎科目の授業評価結果と今後の課題

理工学系FD委員会委員長
都市教養学部理工学系准教授
岡本 龍史

【理工系共通基礎科目の目的と現状】

理工系共通基礎科目とは、従来の一般教養科目の自然科学系列の科目配置に変え、学生の多様な興味関心に応えることと理工系専門科目の基礎作りの両方をめざして編成された科目群である。全学部学生を対象とし、数理学関係、物理学関係、化学関係、生命科学関係、電気電子工学関係、機械工学関係の6分野からなり、平成24年度前期では65クラスが開講されている。履修学生数は延べで4,995名にのぼっており、72名の教員が理工系共通基礎科目を担当している。2012年度前期は、59クラス(90.8%)計3,337名(66.8%)の学生、および計59名(81.9%)の教員からの授業評価アンケート回答が寄せられている(括弧内は回収率)。ここではこれらの結果を含めた過去5年半の経年変化について概観し、今後の課題を考える。

【共通の質問項目の評価結果と経年変化】

表1、2はそれぞれ、学生による授業評価アンケート、および、教員による授業評価アンケートの質問項目である(問5を除く)。

表1 学生による授業評価の質問項目

問1 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。
問2 授業の目的を意識しながら学習することができた。
問3 教員の説明はわかりやすかった。
問4 教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。
問6 成績評価方法について十分な説明があった。
問7 シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。
問8 私はこの授業を受講して満足した。

表2 教員による授業評価の質問項目

問1 学生はこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいた。
問2 授業の目的を意識しながら学習することを促した。
問3 わかりやすく説明した。
問4 学生の質問・意見に対して適切に対応した。

問6 成績評価方法について十分な説明をした。

問7 シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得させることができた。

問8 学生はこの授業を受講して満足したと思う。

表1、2のように、同様の内容に関して学生および教員サイドから評価を実施しており、それら質問に対する回答結果の経年変化を比較すると興味深いことが浮かび上がってくる。経年変化のパターンは各問でほぼ同じであるので、ここでは、問2、7、8を比較する。図1のように学生による評価が僅かずつではあるが毎年上がっている一方で、教員による評価結果には、アンケートを取り始めて以来、大きな変化は見られない。この結果は、教員側が講義の進め方・内容等を改善する努力をコンスタントに行っており、それらが学生からの継続的評価上昇につながっていることを示していると考えてよいと思う。一方で、この図は、学生の授業評価を大きく上昇させることができる余地がまだまだ残されていることも示しており、それを実現するためには、後述するように、教員、職員、大学組織が一体となった取り組みが必要である。

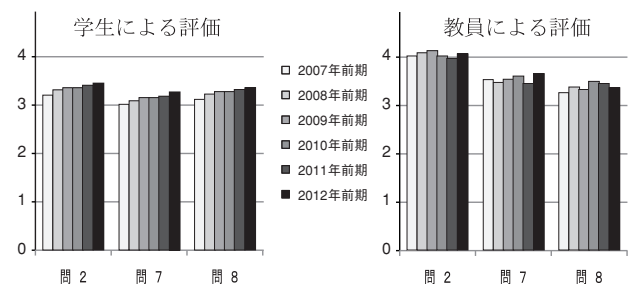


図1 共通の質問項目の評価結果(平均値)の経年変化

【個別の質問項目が設定された背景と目的】

表3、4に学生および教員への理工系共通基礎科目の個別質問項目を記す。

表3 学生による授業評価の質問項目

問9 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人気はどのようであったと思いますか？
問10 快適な環境下でこの授業を受けることができた。
問11 この授業テーマは自分の関心にあっていた。
問12 授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？

表4 教員による授業評価の質問項目

問9 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人気はどのようであったと思いますか？
問10 快適な環境下でこの授業を行うことができた。
問11 この授業で学生がテーマに関心を持つように教えた。
問12 授業全体を振り返ってみて、学生にとってこの授業の難易度はどうでしたか？

これらの個別質問が設定された理由としては、理工系共通基礎科目はその科目の性質上、授業改善には講義手法とともに（あるいは、ある科目ではそれ以上に）、どれだけクラスを少人数にして目が届くようにするかという点が重要であること、および、各学部・学科・コースに所属する多様な学生が同じ講義に混在することが挙げられる。このように、適正な講義サイズを達成し、かつ、多様な学生のニーズを満たす講義を十全に実施することを最終的な目的として、個別質問を実施している。

【個別の質問項目の評価結果と経年変化】

問11、12の経年変化（図2）を見ると、理工系共通基礎科目ならではの特徴が見られる。問11の結果からは、教員側が受講学生の関心を高めようとして努力していることが伺える。実際、教員自由記述欄にも「最先端技術と講義内容の関連」や「この先の専門科目との繋がり」を示すことなどで、学生の講義への関心を高めている具体的対策が多数回答されている。これに対して、この項目における学生の評価は、例年上昇してはいるが、まだまだ改善の余地はあるようである。また、問12を見てみると、教員も学生もともに、やや

難しいと思いながら講義し、受講している現状がみてとれる。

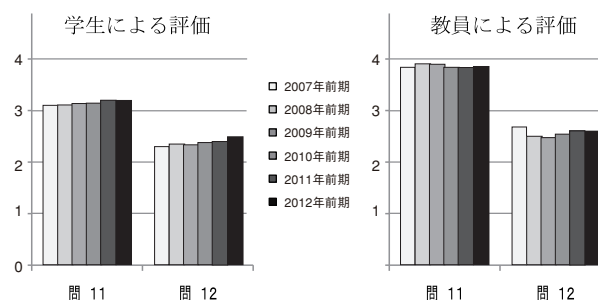


図2 個別の質問項目の評価結果（平均値）の経年変化

【今後の改善に向けた課題】

単純に学生側の理解度を高めることは、「講義レベルまたは講義の容量」を下げるまたは減らすことで容易に達成することができる。しかしながら、大学レベルの理工系教育は「知ってもらわなければならない知識、スキルはあくまで伝える」姿勢を保たねば成立しない。現状は、理工学系の教員の多くが年々少しずつ講義改善を行い、かつ、学生側の理解度・満足度なども僅かながらにも毎年増加しているとみてよい。今後、一定レベルの内容を保ちつつ、より充実した講義を提供するにはどのようにすれば良いのであろうか。

授業改善に向けた個々の教員の努力は当然のこととして、その努力がより効果的・効率的に授業に反映される仕組みを大学側が提供することも必要である。理工系共通基礎科目ではまず、クラスの少人数化、TAの充実が挙げられる。2010年度に実施した二次分析では、少人数クラス（75名以下）の受講生の満足度・理解度が、大人数クラスよりも有意に高いことが示されている。また、現状では200人以上のクラスでのみTAがつくようになっているが、まだまだ不十分である。少人数クラスとTAの充実は、各クラスにおける課題学習の遂行や、それら課題の添削・採点や学生への個別対応に直結しており、現在大きなトピックになっている「学生の自主学習時間」にも密接に結びついている。これらのような教員だけでは解決できない課題に対する各委員会・部会の具体的なかつ迅速な対応の積み重ねが、効果的・効率的な授業改善につながると考えている。